

四條金吾殿御返事

弘安二年四月二三日 五十八歳

なによりも人には不孝がを^恐そろしき事に候ぞ。とのゝ^殿あにを^兄とゝは、われと法華経のかたきになりて、との^離をはなれぬれば、かれこそ不孝のもの、とのゝ^身みにはとがなし。を^女うなるいどもこそ、とのゝはぐくみ給はずば一定不孝にならせ給はんずらんとを^類ぼへ候。所^領領もひろくなりて候わば我が^領りやうえも下しな^領んどして一身すぐるほどはぐくませ給へ。さだにも候わば過去の父母定んでまぼり給ふべし。

日蓮が^祈き^請せ^見い^見もいよいよか^触ない候べし。いかにわるくとも、きかぬやうにてを^触はすべし。この事を^見み候に申すやうにだにもふれ^触ま^触わせ給ふならば、なをなをも所^領領もかさなり、人のを^見ぼへもい^見できたり候べしとを^見ぼへ候。さきざき申し候ひしやうに、陰徳あれば陽報ありと申して、皆人は主にうたへ、主もい^和かんぞを^殿ぼせしかども、わ^和どのの^殿正直の心に主の後生をたすけたてまつらむとをもう心^強が^盛う^盛じやうにして、す^数ね^年んをすぐれば、か^利か^生るり^生しやうにもあ^利づ^生からせ給ふぞかし。此は物のはしなり。大果報は又来たるべしとを^利ぼしめせ。

又此の法門の一門いかなる本意なき事ありとも、みず、きかず、いわずしてむつばせ給へ。大人にいのりなしまいらせ候べし。上に申す事は私の事にはあらず。外典三千、内典五千の肝心の心をぬきてかきて候。あなかしこあなかしこ。恐々謹言。

卯月二十三日

日 蓮 花 押

御 返 事